

## リスニング指導に関する学生意見の質的分析

廣 瀬 浩 二

明倫短期大学 歯科衛生士学科

## A Qualitative Analysis of Student Opinions on Listening Instruction

Koji Hirose

*Department of Dental Hygiene and Welfare, Meirin College*

英語のリスニング・スキルは複雑ではあるが、重要なスキルである。学習者はリスニングによって多くのインプットを取り入れ、結果として、他の英語スキルを促進する。学生の英語音声識別能力向上を目的として、音声知覚の運動理論に着目した。聞き手は音声のインプット受け入れと同時に、自ら音声生成をしており、生成音声と入力音声を比較照合して音声知覚を行っているという理論である。学習対象の音声を連続音声で起こる母音の弱化・機能語の発音・連結・同化とした。モデル音声を聞いた後に、オーバーラッピングで口頭練習を行った。学生のコメントを質的に分析したところ、音声識別能力の向上と共に、英語学習に対するモチベーションの点で効果が認められた。

キーワード：英語リスニング、口頭練習、質的分析

Keywords: English Listening, Repetition Drills, Qualitative Analysis

## I. はじめに

英語の聴解は英語学習において最も複雑かつ重要なスキルの一つであるが<sup>1)</sup>、原則に則ったリスニング指導の不足が指摘されている<sup>2)</sup>。そこで、理論に基づいたリスニング指導を行い、リスニング力の向上を目指した。Vandergrift and Goh (2012)は、聴解における認知過程を示しており、その認知過程によると、記憶の音声表示 (representation of speech in memory) に至るまでには、音声知覚 (speech perception) の段階、構文解析 (parsing) の段階、背景知識の利用 (utilization) の段階を経る。学生の実態を考慮して音声知覚 (speech perception) の段階から始めることにし、音声変化を含む速い口語体の英語 (rapid colloquial English) をわかるようにするという目標を設定した。この目標達成のための方策として、音声知覚の運動理論 (the Motor Theory of Speech Perception)<sup>3)</sup>に着目し、この理論に基づいて口頭練習を行なわせ、音声変化の聞き取り向上を目指した。

音声知覚の運動理論に従うと、特定の英語音を知覚するためには、その英語音を聞き手が実際に発音できることが前提となる。本実践では、オーバーラッピングの手法を使って口頭練習を行った。口頭練習は、「強勢のないところの母音」「機能語の発音」「音の連続 (連結)」「音の連続 (同化)」について行い、指導終了後、学生に授業に関する感想を求め、結果を質的に分析した。

音声知覚の段階 (perception phase) で報告されているL2学習者の問題点は、(1)単語を認識できない、(2)次に続く品詞に注意を向けていない、(3)連続音声をかたまりに区切らない、(4)文頭を聞き逃す、(5)集中できない、である。

本実践においても、学生には文を単語に分節化する能力が欠けているように思われた。このことについては、Vandergrift and Goh (2012)も「単語の分節化スキルを高めることは第二言語の学習者 (L2 listeners) にとっては大きな課題である」と指摘している。読む場合と異なり、聞く場合には単語境界を決定するための時間的な余裕がないためと考えられる。

単語が単独で発音された場合や書かれた場合には個々の単語が認識できたとしても、聞いた場合に、連続音声の中の単語を必ずしも認識できないといった問題がある。また、単語分節化スキルは言語固有のものであり、幼児期に修得されるとされる。母語の単語分節化スキルは聞き手の処理体系にしっかりと植え付けられており、これら母語の分節化方略は母語以外の言語を聞く時にも無意識に適用されるとも言われている。従って、第二言語の単語分節化スキルを学ぶ必要が生じる。

## II. 対象及び方法

### 1. 対象

対象者は、歯科衛生士学科1年生44名である。

### 2. 方法

モデル音声として、小川(1998)<sup>4)</sup>を使用して「強勢のないところの母音」「機能語の発音」「音の連続(連結)」「音の連続(同化)」の聞き取りと口頭練習を行った。指導終了後、学生にリスニング指導に関して、短答式質問(short-answer questions)<sup>5)</sup>を行った。その結果の分析にはKH Coder Version 2.00fを使用した。

## III. 結果および考察

KH Coderによって、学生の自由記述から出現回数が多い語、特に、最小出現回数を6以上とした場合、以下の29語が抽出された。「発音」81回、「英語」55回、「聞き取る」44回、「思う」43回、「練習」39回、「自分」37回、「聞く」37回、「聞き取れる」30回、「言う」26回、「単語」23回、「分かる」21回、「少し」20回、「感じる」16回、「最初」16回、「言える」14回、「聞こえる」14回、「前」11回、「良い」10回、「先生」8回、「苦手」7回、「全く」7回、「読む」7回、「難しい」7回、「スムーズ」6回、「リスニング」6回、「音」6回、「授業」6回、「読める」6回、「イントネーション」6回であった。

最小出現回数を2とした場合、語全体の共起ネットワークは図1のようになった。この図は、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワークを表している。

語全体の共起ネットワークにおいて最も出現回数の多かった語「発音」と関連が強い語に絞った共起ネットワーク(最小出現回数6の場合)が図2である。

語全体の共起ネットワークにおいて最も出現回数の多かった語「発音」が、文脈中でどのように用いられていたかを探った。KWICコンコーダンスの抽

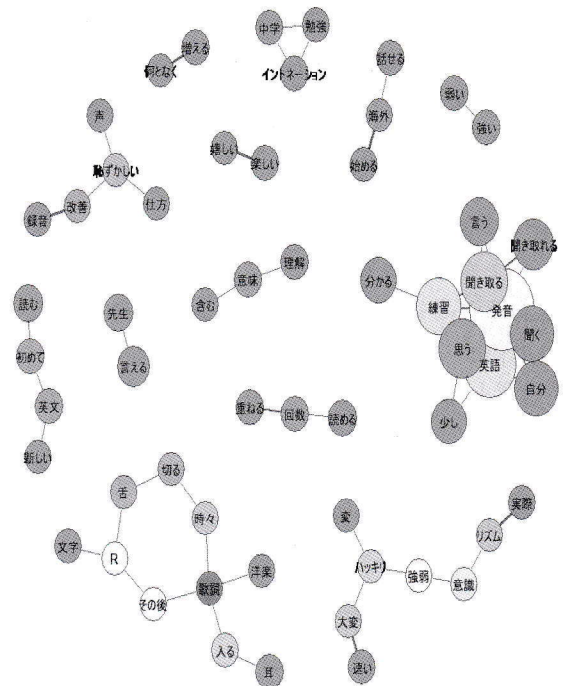


図1 語全体の共起ネットワーク(最小出現回数2の場合)

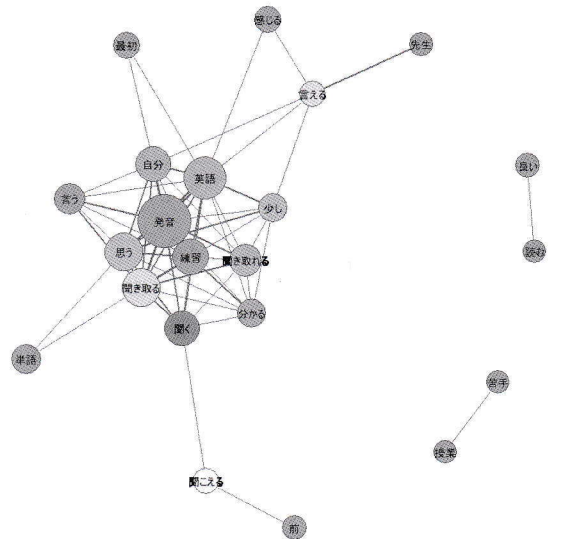


図2 「発音」と関連が強い語の共起ネットワーク(最小出現回数6の場合)

出語を「発音」として検索したところ、81件表示された。さらに、コロケーション統計によって抽出語「発音」のコロケーションを調べた。抽出語「発音」の前後で多く出現していた語は、「練習」14回、「英語」13回、「自分」11回、「聞く」8回、「少し」7回、「聞き取る」8回、「良い」6回、「モデル」4回、「前」4回、「違う」2回という結果になった。

学生のコメントに書かれた「発音」と「練習」のコロケーションを検索したところ、「授業の中で発音練習・聞き取りの練習をしていくうちに発音が直ってきたことが自分でもわかりました」「聞き取

りの練習をして、自分でも発音を練習してからも一度聞いてみると、初めて聞いた時よりも聞き取れる英語が多くなっていた」などの記述がみられた。まとめると、発音の練習は難しいがやりたい。練習によって、言えるようになったし、聞き取りもできるようになったというものである。これらの学生のコメントから、うまくできなかった学生も更に練習を重ねることによって、できるようになるだろうという期待感を持っていることがわかった。

「発音」と「英語」のコロケーション検索から学生のコメントをまとめると、英語の発音は難しいし、苦手である。発音や聞き取りは得意ではない。しかし、発音が少しできるようになった。発音するのが恥ずかしくなくなった。練習によって少し自信がついてきた様子で、好きにもなったようだ。心理面の改善につながったというものだった。

「発音」と「自分」のコロケーション結果から学生のコメントをまとめると、自分の発音に確信が持てず、不安感があったというものである。学生のコメントからわかったことは、自分で自分の発音が間違っているのではないかというメタ認知的な気づきができるようになったことである。また、自分一人ではなく、授業中、他の学生と一緒に練習していく中で気づかされることもあったことである。さらに、英語のリズムを理解し、練習することで自分の発音の改善が図られたことである。

「発音」と「聞く」のコロケーション結果から学生のコメントをまとめると、聞き取りは難しいというもので、練習を通して少しは聞き取れるようにはなったが、まだ達成はされていないということである。また、今後も練習を続けるとともに、インプットの量を増やし、様々な英文を聞く必要性を感じているということである。

「発音」と「少し」のコロケーション結果から学生のコメントをまとめると、練習の必要性を理解し、更に練習を試みようという意欲が感じられることである。練習によって、その効果を自覚し、少しは自信につながったと思われる。また、モチベーションの点で、効果があったと思われる。

「発音」と「苦手」「授業」のコロケーション結果から学生のコメントをまとめると、発音や聞き取りは苦手であるが、授業で練習を重ね少しずつできるようになってくるにつれ、おもしろくなってきたことがみてとれる。学習一般に言えることが英語のリスニングにもいえる。

#### IV.まとめ

本研究では、対象者が英語苦手意識をもつ学生であったため、文脈なしの短い単文を使用して口頭練習を行った。以下の学生のコメントから判断して、音声変化指導の最初の段階としては、短い単文を使用したことは適切であったと考えられる。

「英語は単語のみだと何とか聞き取れますが、文になると、つながっている単語の最後の文字と、その後の単語の最初の文字がくっついて発音されているので、よくわからなくなってしまいます。」

短い文の聞き取りでも「聞き取りの練習も最初は何を言っているのかさっぱり分からなかったけど、後からだんだん分かってきました。」

「聞き取り練習はとても身につきました。始める前は全く簡単な単語も聞こえなかったし、分からなかった。」

ただ、聴解力養成の観点からみると、単文による口頭練習と並行して文脈を伴ったある程度まとまった範囲の会話文などを聞きとる練習も必要である。

また、指導後に行った発音練習に関する学生の自由記述から、英語の発音は難しく苦手であったが、口頭練習を行っていくうちに上達を実感する学生も多いたことがわかった。今回の研究では、音声識別能力の向上を目的とした。認知要因においては、音声識別能力の他に、言語的知識（語彙・文法・談話）・語用論的知識・背景知識・メタ認知知識・ワーキングメモリ能力などが含まれる（Systems Model of Listening）。今後は、他の認知要因も考慮した指導が必要と思われる。

#### 文 献

- 1) Oxford, R. : Research Update on Teaching L2 Listening. System 21 (2) : 205-211, 1993
- 2) Vandergrift, L. and Goh, C. C. M. : Teaching and Learning Second Language Listening. 4-5, Taylor & Francis, New York, 2012
- 3) Liberman, A. M. and Mattingly, I. G. : The Motor Theory of Speech Perception Revised. Cognition 21: 1-36, 1985
- 4) 小川直樹：耳慣らし英語ヒアリング2週間集中ゼミ。22-25, アルク, 東京, 1998
- 5) Dornyei, Z.: Questionnaires in Second Language Research. 49-50, Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah, New Jersey, 2003